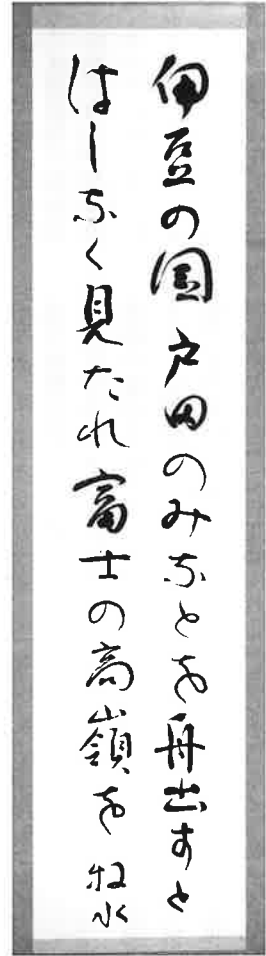


# 沼津市若山牧水記念館

第41号 2008.9.10

編集・発行 沼津牧水会 TEL・FAX 055-962-0424  
〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11 http://web.thn.jp/bokusui/



## 伊豆の国戸田のみなとを舟出すと はしなく見たれ富士の高嶺を 牧水

大正五年十二月二十八日、牧水一家は、喜志子夫人の療養のために住んでいた神奈川県三浦郡北下浦村から東京府小石川区金富町に移住。更に、大正六年五月九日、巢鴨に転居。この頃から牧水は幾つかの旅をしている。

大正六年六月、群馬の磯部温泉、妙義山。八月、秋田、酒田、新潟から長野、松本と回り、十一月、秩父、千葉県大原海岸。大正七年になると、元旦から青森の加藤東籬と鎌倉、沼津、伊豆土肥温泉に遊び、四日に帰京。二月七日に独りで土肥温泉に出掛け、二十四日に帰る。この年は、その後、比叡山から大阪、奈良、和歌山、熊野、那智、鳥羽、伊勢、名古屋を回り、更に十一月に伊香保、沼田、長野と回っている。この半切の歌は、大正七年二月に土肥温泉からの帰りに寄港した戸田の港を出たところで詠まれている。当時、沼津から伊豆西海岸への回船は、沼津港を出て三津、戸田、土肥、松崎と運行されていた。沼津港は伊豆西海岸への交通の要衝として栄えており、西伊豆の産物の中継地として大事な流

通の中心地であった。当時の沼津港は、狩野川河口から一キロほど遡った、現在の永代橋(当時・湊橋)の間にあつて、狩野川右岸の魚町から川廓にかけては、魚市場、荷揚場が連なり、倉庫が立ち並び、背後の市街地には色々な商店や食堂、旅館などが並ぶ商業地が広がっていた。

話を戻すと、牧水の乗った船は戸田の港に寄り、沼津へ向けての帰路についていた。牧水は、その時初めて、海の上に浮かぶように前面に白い雪を被った富士の荘厳な姿を見たのである。土肥から戸田までの航程では気が付かなかつたのか、戸田の港に入るときには見えなかつたのか、などと考えたか、もしかしたら、船酔い知らずの牧水は、船中でも一献傾けていたのかも知れない。富士を見上げたときの感激、感動が「はしなく」に込められていようか。

昭和五十五年七月二十九日、戸田港の御浜岬の先端近く、護岸壁に囲まれた遊歩道の一角にこの歌の歌碑が建てられた。御浜は大きく港を包み込むように伸びた岬で、白砂青松の海岸線が手前の集落まで延びている。

半切は、真面目に書かれた作品で、誰かに贈られたものか、揮毫旅行の際の作品かと思わせる。酔いに任せた勢いのよい作品もいいが、このように真面目に書いた書も心魅かれるものがある。牧水の書は、酔って書いたものでも、半切にきっちり収まりながら、伸び伸びとした風格を感じさせるのだが、このようにきっちり書かれた作品も、牧水の書の魅力の一端を表しているものと考えられる。

(須永秀生)

# 牧水の旅

井辻朱美

牧水は旅を好んだことで有名だ。あのロマンティックな歌の数々を詠んだ牧水だから、どれほど旅に思い入れがあったらうと思ひ、牧水の紀行文を中心にエッセイを読んできた。

紀行文はもとと好きだ。エッセイストであり、俳人でもあつた江國滋の『旅ゆけば俳句』シリーズなどは大の愛読書だ。日本だけでなくヨーロッパやアメリカの旅のつれづれを文章で描き、スケッチをし、俳句で締める、というあのスタイルは、いながらにしてこちらも机上の旅に出ることができずばらしい時空間体験装置だ。しかし、そういうえば、芭蕉を典型として、俳人には旅情と俳句を合体させた紀行文が多いのに、歌人にはあまり見かけない。

たとえば、女流俳人、黛まどかにはサンチャゴ・デ・コンポステラまでの巡礼の道をたどつた『星の旅人』（平成二十二年 光文社刊）があるのに、近い世代の、そしてお互いのジャンルの人気を背負つていた一方の俵万智には、そういう旅物語はない。短歌と紀行文は、もしかしたら相性が悪いのだろうか。

そんなことも考えながら、「みなかみ紀行」や

「木枯紀行」などを読んだ。

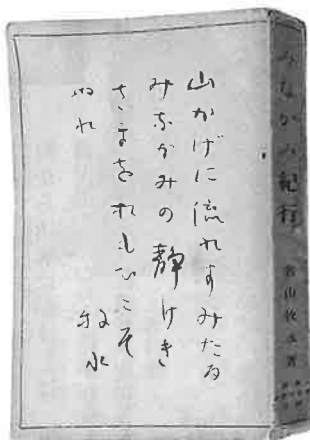
まず、予想に反して驚いたのは、牧水はこれっぽっちも歌枕を求めたりしていない、ということだつた。西行の跡をたどつた芭蕉のように、先人が歌に詠んだ地を訪れ、時の彼方に思いを馳せる、という文学的なふりかえりの営為が牧水にはないのだ。歌枕だけでなく、史跡にも興味がないらしい。「かたはらに秋ぐさの花かたるらくほろびしものはなつかしきかな」の牧水だというのに、だ。

いくらなんでも、これには小栗判官とか那智の滝の由来とかが出てくるだろうと思つて読んだ「熊野奈智山」にも、そういう歴史的興味はまったく見られない。自殺をほめかして出奔したお坊ちゃまと間違えられたエピソードは面白いが、神話的文学的連想に事欠かない那智の滝や熊野に対して、その一言もないのはたいそう不可解だつた。旅に出てから、地元の人に義民の乱の話などを聞かされ感激した、というくだりは別のエッセイにあるが、史実のために旅に出るといふことはなかつたようだ。

わたし自身は、ヨーロッパであろうと日本で

あるうと、その地にあつた戦いやもろもろの文明の栄枯盛衰や古代寺院、つまり時間が刻みつけた跡を、実際にその地に立つて見はるかしたいから出かけている。旅の醍醐味は「夏草や兵どもが夢の跡」に尽きる、と思つていた。

しかし、牧水の旅はひたすら歩きながら、現在目に見える自然を叙しているばかりだ。特に鳥や樹木や溪が好ましい。そして、いたるところで酒を所望し、酒を飲んでいく。けれど、敵密なナチュラリストであるわけでもないように、地誌や植物相に対する理科的な興味やこのような地形をなすにいたつた経緯などに対する思い入れは薄い。淡々とした歩きっぷりなので、愛用の草鞋での「ウオーキング・ハイ」が主眼なのかもしれない、と何だか戸惑つてしまった。



『みなかみ紀行』  
（大正13年 書房マウンテン刊）

宮澤賢治は、歩きながら詩を書く。たとえば連作「小岩井農場」では、目に入るものから次々に連想が飛んでゆき、童話の世界や、ふと思ひ出した知人の境涯などをとりとめなくさまよつ



『若山牧水随筆集』  
(平成12年 講談社文芸文庫)



『新編 みなかみ紀行』  
(平成14年 岩波文庫)

ては、また戻ってくる。かれのいうところの四次元空間の「心象スケッチ」である。主観と客観が渾然一体になって、別の空間を作り出してしまう。

こういうあり方と、牧水の歩き方は全然違う。あんなに大きな時空間を澎湃と湧出せしめる歌を詠む人が、歌以外の日常意識ではどうしてこんなに心の振幅が狭いんだろう。どうにもその歌の依つてくるところがわからない。

しかし、考えてみると、宮澤賢治は、詩ほど

たくさんではないが、短歌も作っている。その短歌はどれも夢幻的で、独特の心象風景ではあるが、童話に発展する前の種のような趣で、大成功しているとは言いがたい。短歌は「ただごと歌」というサブジャンルを持つように、どんなに平板なことを書いても、それなりに歌が奏でられてしまう、という叙情的形式である。だから、賢治のように想像力過多で奇想あふれる人間にはかえって合わず、平静でリアリステイックな意識に対して、ほどよく機能するのもかもしれない。そういえば、白秋も、エキゾチックな幻想は詩に書き、ストレートな日常や写生のほうを短歌にしていた。

そう思いなおし、歌枕の先入観をすてて、ふたたび牧水の文章を読んでみると、想像力のエントロピーはさほどでもないが、観察力の強度はただものではないことが見えてきた。特に水の描写には驚く。

「水はまったく自然の間に流るる血管である」とする牧水は、「私の、谷や川のみなかみを尋ねて歩く癖も、一にこの水を愛する心から出ているのである」(「草鞋の話 旅の話」とする。

独りになってひた急ぐ途中に吹割の滝と、いうのがあった。長さ四、五町、幅三町ほど、極めて平滑な川床の岩の上を、初め二、三町が間、辛うじて足の甲を潤す深さで、一帯に流れて来た水が或る場所に及んで次第に一カ所

の岩の窪みに浅い瀬を立てて集り落つる。窪みの深さ二、三間、幅一、二間、その底に落ち集った川全帯の水は、まるで生系の大きな束を幾十百緞じ集めたように、雪白な中に微かな青みを含んでくるめき流るる事七八十間、其処でまた急に底知れぬ淵となって青み湛えているのである。「みなかみ紀行」

書き写しているうちに、この数字の細かきにもめまいがした。

今日の深い色の空の真中に立つこの山にもまた自ずと深い光が宿っていた。半ばは純白の雪に輝き、なかばは山肌の黒紫が沈んだ色に輝いていた。而してその山肌には百千の糸巻の糸をほどいて打ち垂らしたように雪がこまかに尾を引いてしずれ落ちていたのであった。「木枯紀行」

二、三日来の雨で、滝は夥しく増水しているのだそうだ。大粒の飛沫が冷かに颯々と面を撲つ。じいっと佇んで見上げてみると、ただ一面に白々と落ち下っているようで、実は団々になった大きな水の塊が後から後からと重り合つて落ちて来ているのである。時には岩を裂くように鋭く近く、時には遠く渡つてゆく風のようなその響に包まれながら、茫然見ていれば次第に山全体が動き出して来る

ようで、言い難い冷気が身に伝わって来る。

「熊野奈智山」

これは凄い。微細な部分をよくとらえるクリアーなカメラのレンズのようだ。ここに、甘やかな叙情とか、泉鏡花のようにそこから物語が醸成されてくる雰囲気はない。しかし、この素材を三十一音に入れれば、何かの気韻きいんが発してくることは予想される。

末ちさく落ちゆく奈智の大滝のそのすゑつかたに湧ける霧雲

雲のゆき速やかなればおどろきて雲を見て  
みき滝のうへの雲を 「熊野奈智山」

歌になると、俄然、パノラマの広角レンズの世界になつている。ロングショットの爽快さとともに、胸郭が一気に広がるような大きな息吹がなつかしく吹きかよう。

このスケッチからこの作品ができるのか。やはり、牧水はエッセイストではなく、歌人だとしみじみ思う。

遠く望む噴火山のいただきのかすかな煙のやうに、

腹這つて覗く噴火口の底のうなりの様に、

そして、千年も万年も呼吸を続ける歌が詠み度たい。 「空想と願望」

とあるが、まさに呼吸をする歌だ。

生の喜びを感じる時は、つまり自己を感じる時だとおもう。自己にびったりと逢着するか、或はしみじみと自己を噛み味っている時かだろうとおもう。

そういう意味に於て私にとつては矢張り歌の出来る時がそれに当る様である。

「自己を感じる時」

そして、自己を感じるときとは、牧水にとつて自然の中を、特に山を歩いてるときであったようだ。

日もささぬ木立の深いなかで眼を瞑つぶつてそれに耳を傾けると、久しく忘れていた「自分」というものに思わずも邂逅めくろいつたような哀しさ楽しさを沁しみ々と身に覚えたのであった。痛いようなその記憶がこの季節と共にまざまざと私の身に帰つて来た。そして心の濁くようにひたすらに山が恋しくなつたのであった。

「山上湖へ」

鳥の鳴き声に関して、水の視覚的とはちがう、聴覚的に凄い描写があるのだけれど、今は割愛する。また、樹木に関しては、「沼津千本松原」のエッセイが示すように、松原にひかれてこの地に移り住んだ牧水は、珍しく熱い心を吐露し、鼻による松原一部伐採計画に反対を唱える。「樹木たち」というソウルフルな呼びかけは、賢治のように木が精霊や人間に化するのではな

いけれど、生命の力強い交感を表して余りある。牧水のロマンティックで時空間遠望的な、あの歌々の根っこにあるものを今回垣間見て、一つの驚きを得たとともに、文章の冷静な中から、ああいう歌が突然飛翔してゆく凄さ、その奇跡の瞬間を目のあたりにすることができたのは嬉しい。

とまれ、わたしも草鞋ならぬ花模様のスニーカーで、旅に出たくなった。

(編集部注) 文中で引用されている紀行文と随筆は、左記の文庫に収められています。

『新編みなかみ紀行』……『みなかみ紀行』『木枯紀行』

『熊野奈智山』『空想と願望』『山上湖へ』『沼津千本松原』

『若山牧水随筆集』……『草鞋の話 旅の話』『自己を感じる時』『沼津千本松原』



〈筆者プロフィール〉 いつじ あけみ

一九五五年東京生れ。東京大学理学部生物学科を経て同大学院比較文学比較文化修士課程修了。白百合女子大学教授。歌誌「かばん」発行人。歌人、翻訳家、小説家

として多彩な活躍をしている。

歌集に『地球追放』『水族』『吟遊歌人』『コリオリの風』『風の千年伝説』『水晶散歩』詩集に『エルフランドの角笛』評論集に『魔法のほうき』『ファンタジー万華鏡』など。訳書も多数ある。今春開催した第二十回「雛の歌会」の講師。